

鼠径ヘルニア嵌頓3名男、大腿ヘルニア嵌頓4名女性うち腸管切除3名、閉鎖孔ヘルニア8名女性、腸管切除5名、臍ヘルニア1名うち腸管切除1名、大腸穿孔5名男性2名で、癌の穿孔例は62病日退院いたしたが、特発性穿孔の1例は59病日死亡した。女性の穿孔例のうち特発性の1例は2病日死亡、1例は57病日退院。大腸内視鏡による穿孔例は24病日退院した。直腸癌による閉塞例は男女1名ずつあり、男性は14病日死亡、女性は人工肛門造設の上3期手術を行い64病日退院した。SMA血栓症は男性1名あり、150病日退院。絞扼性イレウスの女性2名は12病日と19病日に退院した。虫垂炎穿孔の女性は8病日と17病日に退院、男性は16病日透析のため転科と28病日に退院した。

80歳以上の手術総数増加は主に鼠径ヘルニア、内痔核手術の増加によるものであり、80歳以上の緊急手術例は予定手術例の比例した増加は示さなかった。これは当院の地域性による影響が多いと考えられた。

## 7 80歳以上高齢者腸閉塞手術症例の臨床的検討

登内 晶子・須藤 翔・大谷 哲也  
眞部 祥一・堅田 朋夫・石野信一郎  
岩谷 昭・横山 直行・山崎 俊幸  
桑原 史郎・片柳 憲雄

新潟市民病院消化器外科

【目的】高齢者腸閉塞症の手術治療上の問題点を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】過去4年間に当院救急外来を受診し、腸閉塞で手術が施行された172例を対象に、80歳以上（高齢者群、n=64）と79歳以下（若年者群、n=108）の2群に分け治療成績につき検討した。術後合併症の重症度基準には、Clavien-Dindo分類を用いた。

【結果】高齢者群の腸閉塞は、単純性19例、複雑性44例、麻痺性1例であった。術式は、小腸切除23例、ヘルニア根治術20例、癒着剥離術17

例、その他4例であった。高齢者群の50例（78%）は併存疾患があり、若年者群より有意に高率だった。高齢者群の30例（48%）に術後合併症を認め、7例（11%）に死亡を認めた。高齢者群は、在院期間、ICU滞在日数、呼吸器装着期間は、有意に延長していた。術後合併症の頻度、合併症の重症度（gradeⅢ以上）には両群に差がなかった。

【結語】80歳以上の高齢者は術前併存疾患が高率で、腸閉塞症手術では、術後ICU管理の重要性が示唆された。

## 8 当科における高齢者の腹部救急疾患

廣瀬 雄己・下田 聡・武田 信夫  
田中 典生・小山俊太郎・丸田 智章  
塚原 明弘・丸山 智宏

県立新発田病院外科

平成9年1月から24年12月までの15年間の当科における高齢者（80歳以上）の腹部の緊急手術症例について検討した。5年毎にみると症例は増加傾向にあり、いずれの時期も70歳代が最も多かった。それぞれの年代に80歳以上の占める割合は8.8%、17.5%、21.2%と増加傾向にあった。全体では男性が女性の約1.4倍だが、80歳以上では女性が男性の約1.8倍と多かった。疾患は腸閉塞、腹膜炎が全体の約半数を占め、80歳以上では約66%と多い傾向にあった。腸閉塞の原因は絞扼性イレウス、閉鎖孔ヘルニア、大腿ヘルニアが多かった。腹膜炎の原因は大腸穿孔が多かった。当科での状況について報告する。